

Prognostic impact of disseminated intravascular coagulation score in acute heart failure patients referred to a cardiac intensive care unit: a retrospective cohort study

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-02-08 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 猪谷, 亮介 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.20780/00032095

主論文の要旨

Prognostic impact of disseminated intravascular coagulation score in acute heart failure patients referred to a cardiac intensive care unit: a retrospective cohort study

(CCUに入院した急性心不全患者におけるDIC scoreの予後への影響：後ろ向きコホート研究)

東京女子医科大学循環器内科学教室

(指導：萩原 誠久教授)

猪谷 亮介

Heart and Vessels 第32巻 第7号 872頁～879頁 (2017年7月発行) に掲載

【要 旨】

急性心不全入院患者の凝固異常を、日本救急医学会 (JAMM) 急性期DIC診断基準により点数化したDIC scoreを用いて評価し、DIC scoreと予後の関係について検討した。東京女子医科大学病院CCUに2007年から2012年の間に急性心不全の診断で入院した患者(367人)のうち、CCU入院時にDIC scoreを算出することが可能であった160人を後ろ向きに検討した。DIC score 2点以上の群(34人)をDIC score高値群として、DIC score低値群との2群に分けた。両群間で入院後の総死亡を比較すると、DIC score高値群は入院後の生命予後が不良であった。入院時の年齢、性別、虚血性心疾患の既往、収縮期血圧、BNP、血清ナトリウム濃度、血清クレアチニン、BUN、ヘモグロビン濃度、CRP、入院前の内服内容(ワルファリン、硝酸剤)、入院中の治療内容(静注利尿薬、血液透析、IABP)で多変量解析を行った結果、DIC score高値は入院後の総死亡、および総死亡と心不全による再入院の複合エンドポイントの独立した規定因子であった。DIC score 2点以上であることが、急性心不全入院患者の予後規定因子となりうることを示唆された。入院時のDIC scoreを算出することが、急性心不全入院患者のリスクの層別化に有用である可能性がある。